

# 未来への伝承

## 「銚子石」に見る中世の石材流通

今回の未来への伝承は、千葉県銚子市周辺でとれる砂岩をもとに、中世(鎌倉・室町時代)の石材流通を考えてみたいと思います。

写真は、土浦市内上高津にある宮脇B遺跡の発掘調査で平成8年に出土した、銚子製砂岩の石塔「宝篋印塔」の破片です。相輪と呼ばれる、塔の最上に乗せる部分で、もともとは傘を意図して造られていました。今回この資料を紹介する理由は、現



※上の写真は、左図の石塔(宝篋印塔)の上部の一部であったと考えられます。



在までのところ土浦市内で発見された唯一の例であるからです。

この遺跡からは、戦国時代頃(16世紀)と思しき堀の跡とその堀にかかる土橋の柱穴が見つかりました。堀の中には、かわらけという素焼の土器皿をはじめ、土鍋や土器播鉢、石臼などの破片などが捨てられています。上高津の台地上には、中世の貝塚や墓地の遺跡が見つかったり、鎌倉街道と呼ばれる古道

がはしっていましたので、この近辺に中世の集落が存在していたものと考えられます。

ところで、平成17年に「石造五輪塔」、昨年に「中世人の信仰のかたち 板碑」という記事を、この未来への伝承で紹介しました。この中で板碑という石塔の材質には、埼玉県秩父地方の荒川上流の緑泥片岩と、筑波山南麓の黒雲母片岩の2種類があるとお話ししました。卒塔婆としての板碑には、板状に薄くはがれる片岩という材質が最も良く適合していますが、五輪塔や宝篋印塔のような立体的な塔を造形するには片岩以外の材質のほうがより適しています。

筑波・真壁の筑波山塊西南麓と、岩瀬・笠間など筑波山塊北側から東側のかすみがうら市(旧千代田町)にかけては、明治時代から昭和初期に花崗岩の大規模な産地でした。当然、中世五輪塔や宝篋印塔もこの地域は花崗岩製のものが多いに多数を占めています。土浦でも市街地を離れた墓地には、中世から江戸時代初め頃にかけての五輪塔の部材の一部をありふれて見ることが出来ます。

そのような中で、土浦でも内陸に近い上高津の遺跡でわざわざ銚子産の石塔の一部が見つかったということは、当時の物資の流通網の一端を知ることになります。銚子周辺から千葉県北西部にかけては、この砂岩の石塔が主流を占めています。茨城県に入ると稲敷市から行方市にかけての地域は、花崗岩製の石塔とほぼ同じくらい銚子製砂岩の石塔が見られます。かすみがうら市の出島地域でも近年の調査で、数例ですが銚子製砂岩の石塔が発見されました。銚子から土浦までは、直線距離で約70キロメートル以上あり、単純に比較すると川崎市・横浜市(神奈川県)程度に相当します。重量のある立体的な造形の石塔を、馬や台車を用いた陸上交通のみで移動させるには、距離的にやや難がありそうです。

つまり、この石塔の流通には利根川・霞ヶ浦の船による水上交通が与っていたと考えるのが自然です。当時の船の交通や、流通がどのような姿であったかは記録が乏しく不明な点が多いのですが、年貢など重量物の運搬には馬や荷車よりも船が適していることは確かです。稲敷から出島・土浦にかけて銚子砂岩の数が少なくなる現象は、生産地から次第に流通量が減少していくことと、花崗岩の産地が近いためその流通量に押されていることが反映しているようです。

今回の記事に伴い、宮脇B遺跡出土資料を上高津貝塚ふるさと歴史の広場のホールにて展示しています。日頃は収蔵庫に保存している資料を展示しますので、皆さんぜひ足をお運びの上、ご覧ください。

今回記事に併せて、宮脇B遺跡出土資料を上高津貝塚ふるさと歴史の広場のホールにて展示しています。日頃は収蔵庫に保存している資料を展示しますので、皆さんぜひ足をお運びの上、ご覧ください。

今回記事に併せて、宮脇B遺跡出土資料を上高津貝塚ふるさと歴史の広場のホールにて展示しています。日頃は収蔵庫に保存している資料を展示しますので、皆さんぜひ足をお運びの上、ご覧ください。